
ロストアローズ

ナマラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロストアローズ

【Nコード】

N89750

【作者名】

ナマラ

【あらすじ】

幻想的な世界にて綴られる物語。

魔女。魔道士。契約。代償。願い。涙。

激流の如く流れる運命の中、言葉を失い二人きりになった少年は世界をその目で見ることとなる。

人は一体、何の為に何に祈るのだろうか……。

プロローグ

「はあはあ、ああああ！」

日は沈み、月が辺りを照らす真夜中の森の中。一人の男が息を切らしながら走る。ランタンを掲げて、足元を照らすのがやっとであるうほど暗い中、男はランタンはおろか荷物の一つも持っていないかった。

この男だって何も手ぶらで森に入った訳ではない。後ろから追いかけてくる奴らから逃げる際にどこかに落としてきてしまったのだ。しかし、男は別にそれを惜しいとは思っていなかった。寝袋や食料を始めとした、旅の必需品の入った重い荷物。そんなものを持つていたら、今頃自分は奴らの餌食になっていたはずだからだ。

「くそつ、くそくそつ！ 狼の分布がずれたなんて聞いてないぞ！」

男が追われていたのは碧色狼の群れだった。集団で行動し、圧倒的な脚力とチームワークで獲物を追い詰める森のハンター。人間だろうと恐れることなく襲いかかってくる凶暴性から、この西の国では不吉の象徴だとされている。

この男は不運にも、その狼たちに目をつけられてしまったのだ。

ガサガサと、木々を揺らす音がそこらじゅうから聞こえる。男を追いかけている狼は目で見えるだけで七匹。多分、それで全てだろうと男は考える。碧色狼はその名の通り碧い毛並みをしている。月の光に照らされる碧の毛は目立つのだ。その為、目で見えているだけいると考えて間違えない。自然の中において、目立つ毛並みは不利に思えるが、彼らに限っては毛並みの色など関係ない。彼らを目で見るということは、彼らもこちらを見ているということ。そして、彼らに見られるということは、そのまま死を意味するのだから。

その時、男は木の根に足を取られてしまった。なすすべもなく、男はいつも以上に冷たい地面に叩きつけられた。その一瞬の隙を狼た

ちが見逃すはずがない。

唸り声と共に狼たちは一斉に男に飛びかかる。

「う、うあああああ」

もう駄目だ、そう男は思った。両手を顔の前でクロスして、せめてもの防御に出たが、それが通じるはずがない。

しかし、狼の牙も爪も男には届かなかった。代わりに視界に現れたのは一人の女。赤いフードを深く被り、その手にはそれ以上に赤い紅蓮の炎を灯していた。辺りにはさっきまで男を追い詰めていた狼たちが黒焦げの無残な状態で横になっていた

「まったく、犬の分際で余計な労力を使わせて……」

呟きと共に女の手から炎が消えた。男は今だ上がったままの息で女に尋ねた。

「あんた、まさか……魔導士か？」

女は澄ました顔で答える。

「違うわ。あたしは魔女よ。ウィザードじゃなくてウィッチ。ところでおにーさん、ちょっと道をお尋ねしたいんだけど……カターニヤって町に行きたいのよ。観光と、ついでにちよつと任務があつてね」

？

第一話『出会い』

当たり前のことだが、沈まない太陽はない。

今日この日の太陽も沈みかけ、鮮やかな夕暮れを作り出していた。

「おい、ルー坊」

商店街を歩いていると、不意に声をかけられた。この野太く、それでいてよく通る声は多分古着屋のあんちゃんだろう。振り返ると……ビンゴ。あんちゃんがこちらに向かって手を振っていた。

僕は駆け足で駆け寄る。

「あんちゃん。そろそろルー坊はやめてよね。僕もう一七歳だよ？さすがに坊ちゃん扱いは恥ずかしいって」

「何を生意気言ってやがる。ルー坊はいつまでたってもルー坊だ」にやにやしながら、あんちゃんは僕の頭をこ突く。

「それより見ろよ。じゃじゃーん、ブルーノブランドの新作が完成したぜー！」

言って、あんちゃんは自作のシャツを僕に見せびらかすようにかざした。

「へえー、もう出来たんだ。これで二三作目。今回は随分早かったね」

「ファッションの神が降りてきてな、徹夜で作りあげたのさ。で、どうよルー坊」

「うーんと、いいんじゃないかな。動きやすそうだし」

「動きやすさじゃねえよ。デザインを聞いてるんだ。全体のバランスがどうか、そうゆづのを頼む」

と、言われたのだが、僕は首を傾げた。そもそも僕は服装なんかに気を使ったことなんてない。だから、全体のバランスなんて言われても、変な形だとか、なんで袖の部分にチャックが付いてるんだろつくらいのことしか言えない。しかし、それはきつとあんちゃ

んが求めている意見ではないだろうし……。

僕が考え込んでしまうと、あんちゃんに深いため息を吐かれた。

「お前さあ、仮にも一七歳ならもう少しオシャレとかに興味を示せよな」

「ふふん。あんちゃんも甘いな。今日僕がこんだけオシャレしてるのに気付かないなんてね！」

「それは作業服だろうが……」

当然、一瞬でバレた。第一、今は仕事帰りなので、オシャレなんてしてるはずがないのだ。

「はあ、まったくどうして俺はことごとくアドバイザーに恵まれないんだろうな」

「日頃の行いじゃない？」

「てめえが言うな。そうだ、オシャレで思い出したんだが、お前もこの前やった服着れなくなっただんじゃないか？ 成長期だか擦り切れたかで。売れ残りでよけりや今から似合いそうなの見繕ってやんよ。勿論、エミリアの分もな」

「ありがと、と言いたい所なんだけど、今から清掃のバイトでさ」

「工場勤務の後はアルバイトか、ほんと年中無休で忙しい奴だな」

「仕方ないよ、自分の為だもん」

「姉ちゃんの為の間違いだろ。このシスコン」

言って、あんちゃんは爽快に笑った。

「じゃ、服は宿屋のオヤジに届けとくわ。お前はバイトを頑張れ」

「うん。お互い頑張ろうね、夢の為に」

この後、バイトを終えると、家に帰り姉ちゃんの着替えを手伝い、部屋の掃除をして僕の一日が終わる。なんてことない、とてもとても幸せな一日。幸せな日常。

当たり前のことだが、永遠に続く幸せなど、この世には存在しないのである。

+++++

当たり前のことだが、朝日は眩しい。

いつもの時間に目が覚めた。朝の目覚めが不快な人もいるが、僕の場合はそんなことはない。眩しい朝日がうつとうしいというだけで、布団から起き上がることに抵抗は感じないし、抵抗もしない。

朝がくるのが待ち遠しいとまでは言わないが、不快ではないことは確かだった。

姉ちゃんを起こして朝ご飯を食べさせ、仕事場に向かう。観光都市カターニヤの美しい景観を作り出す煉瓦を作る工場だ。煉瓦製造工場勤務なんて、カターニヤ市民からすれば憧れの職業なのだが、僕はまだまだ下っ端……よりも下の清掃係だ。歳が歳なので仕方ないのだが、僕より後に入ってきた人が入った当初から僕より位が上だというのはなんだか不思議な気分になる。仕事が終わると清掃のバイトに入る。朝から晩まで掃除ばかりしてる気もするが、まあ気のせいではないだろう。自覚はあるのだ。

ただ、今日はいつもと勝手が違った。毎日のような掃除しているホテルにお偉いさんが来るのだ。一体何がどう偉いのかは分からないが、とにかく偉い人が来るらしい。ホテル側としては絶対に失敗できないプレゼンのようなもの。その為、僕のようなバイトは強制的に休みと、厄介払いをされたのだ。予期せぬ休みだが、喜んではいられない。休みということは、今日働くはずだった四時間分の給料が貰えないということだ。それは僕らにとってはかなりの死活問題である。

「まあ、切り詰めればなんとかかなるかな」

問題はお偉いさんが何泊するかなのだが……あまり気にしてばかりでも仕方ない。せっかく入った休みなのだ。せめて有効に活用することにしよう。久しぶりに姉ちゃんと出かけようか。ブルーノのあんちゃんと遊ぶのも悪くないかもしれない。ファッションとやらがどうゆうものなのか聞いてみようか。

招かれざる休みの中、無理やりポジティブになろうと夢想していると、あんちゃんの古着屋の近くまで来ていた。仕事終わりはこの道でホテルまで向かうので、行かなくていいと分かっている、いつもの調子でやって来てしまったようだ。姉ちゃんと出かけるのも捨てがたいが（とゆうか僕としてはそっちが本命だった）ここまで来てしまった以上は仕方ない、あんちゃんと遊んでいくことにしよう。

あんちゃんは古着屋の前で誰かと話していた。後ろ姿しか見えないうが、その誰かは少なくともこの通りの人ではないだろう。お客だろうか。

声が聞こえるくらいまで近くに来ると、あんちゃんも僕に気がついたように手を振る。すると、あんちゃんと話していた人物が僕の方に体を向けた。女性だった。一〇代後半から二〇歳くらいの若い女性で、失礼だろうが、本気でビビるほど綺麗な人だった。長い金色の髪は風に吹かれる度にサラサラと揺れ、キリッとした赤の瞳は吸い込まれそうに澄んでいて、頭に比べてかなり大きい赤いフードの付いたパーカー、そのフードを深く被っていたり、首から古ぼけたランタンを提げていたり、よく分からない点もあったが、そんなミステリアスさでさえ彼女の魅力だと思ってしまうほど、彼女は綺麗だった。

「冗談じゃなく、僕は彼女に目を奪われていたのだ。」

「あんた、名前は？」

女性が僕に問いかけてきた。慌てて、僕は裏返りそうな声で答える。

「る、ルカ・アルマーニです」

「ルカ……もしかして、この子が？」

女性は今度はあんちゃんに問いかける。あんちゃんは相変わらずにやにやしながら、そうそうと答えた。

「ルカ。通称ルー坊だ。この通りの奴らは大体そう呼んでる。いやしかしナイスタイミングだぞ、ルー坊。今この旅人さんにお前の

話をしていたところなんだ」

「僕の方？ それまたどうして」

「なんでもここまで来たはいいが、宿がまだ見つかってないんだと」

「へえー」

「へえー、じゃねえんだよ」

あんちゃんに頬を引つ張られる。

「お前んとこなら部屋なんていくらでも空いてるだろ。案内しろって言うてんだ。察しろ、そんぐらい」

「いでで、分かったからはやして」

手が離されると、旅人さんはおかしそうに笑っていた。

「本当、話に聞いた通りなのね。それで、ル力君。あたしあんまりお金持ってないんだけど、大丈夫かしら」

「お金は大丈夫だと思います。安さが売りの宿なんです。この町には観光ですか？」

「うん。観光と、ついでに仕事が少しね」

女性の一人旅か、ついでの仕事とやらが気になるが、そこは詮索しない方がいいだろう。それよりも、あんちゃんが何を吹き込んだのが気になる。

すると、いつの間にか少し離れていたあんちゃんが僕を手招きしている。怪訝に思いながら近づくと、小さな声で僕に告げるのだ。

「俺が思うに、お前がいつまで経ってもヘタレなのはファッションもそうだが、女を知らないせいだ。丁度いいところに歳の近い、それもとびきりの美人がいる。頑張れよ、ルー坊！」

いや待て僕に何を頑張れと！？

そう言おうとしたが、あんちゃんは俺を無視して旅人さんと話をつけてしまった。まあ、断ろうと思えば嫌だと言えば言いだけの話なのだが、僕が案内してくれるのだと信じてやまない旅人さんが、

「よろしくねっ」

と笑顔で言うのだ。

この笑顔をに向かってノーと言える奴は男じゃないな、なんて呑気にも僕は思ったのである。

+++++

あんちやんと別れ、僕と旅人さんは宿屋を目指す。ただ、今からすぐに向かつて時間も持て余すだろうということで、少しだけこの辺りを案内することになった。僕はカタールニヤで生まれカタールニヤで育ったので、案内なんてお手の物だ。とくに宿屋の面している一〇番通りに関しては自分の庭と言っても過言ではない。

一〇番通り。カタールニヤの南の端に位置するこの通りは観光スポットではなく、地域住人が利用する店の集合体のようなものだ。しかし、こんな場所だからこそ隠れた名所があるのである。中央通りの観光客に媚びることしか考えてない店なんかより、よっぽどいいものがここにはある。……まあ、自分の家のペットが一番可愛く見えるような、そういう身内褒めの感覚がないとは言わないが、そうだとっても引けはとらないと思う。

土産屋や雑貨屋、硝子細工の店などを一通り周り、丁度いい頃合いになったので宿屋に向かうことにした。

「ルカって有名人なのね」

僕の隣を歩いていた旅人さんが不意に語りかけてきた。

「行く店行く店でみんなに声をかけられてる。いくら超地域密着型の通りだからって、普通こうはいかないわよ」

「まあ、確かに顔は知られている方だとは自負してますけど……でも、そんなに誇れることでもないですよ」

「顔が知られているから凄いいんじゃないわ」

顔が知られるだけならば、法でも犯して手配書をばら撒かれればいいのだ。あつという間に有名人になれる。だから、彼女はそうじゃないと主張する。

「みんながみんな、あんたに対して好印象なのが凄いのよ。大多数から好かれるのって、なかなか難しいものなのよ？」

彼女の言つとおり、人は多かれ少なかれ敵というか、自分を嫌う人間を近くに持っている。だから、旅人さんからしてみれば僕は凄いらしい。ただ、あんちゃんにしたって他の人たちにしたって、僕個人を見ている人は少ないだろう。僕と姉ちゃん。アルマー二姉弟をセットで見ているから、僕はみんなから好かれるのだ。自覚はあるのである。

「それに、今日もまた、あんたを好く人間が一人増えたわよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、旅人さんはそう言った。彼女の表情に大変ドギマギしていると、宿屋の前まで着いた。

「……へえ、外から見るだけでも結構いい宿じゃない」

宿屋スナツフルズ。煉瓦造りの古い建物だ。海に面したカターニヤの町では湿気や潮風に負けない丈夫な煉瓦造りが主流なのだが、例え煉瓦でも影響が全くない訳じゃない。しかし、この店はその痛みこそが味となり、どこか懐かしさを感じさせる外観なのだ。いつそのこと宿の名前も「故郷」とかにしてしまえばいいのに、と思ったこともある。

「激安だつて聞いたときは正直不安だつたけど、これだつたら少しくらい高くても文句は言わないわ。ここは、ルカのご両親が経営してるの?」

「いえ、僕は親はいないですよ。ここの部屋の一つを特別に間借りして、姉ちゃんと二人で住んでるんです」

「そっかそっか。確かに親がいたら、工場勤務なんかしてないよね」話しながら、扉を開き中に入る。中は木製の椅子と机が並べてあり、食堂のような風景だ。そして、そのまんま一階は食堂として使われている。宿屋の看板を掲げてはいるが、実際は客の殆どが食堂利用者だったりする。だから僕なんかが部屋を借りれるし、旅人さんのような急な客でも問題ないのだ。

「おじさん、おばさん。ただいま帰りました」

カウンターで作業をしていた二人に声をかけた。すると、おじさんが笑顔でこちらを向いた。

「おう、ルー坊。今日はバイトなかったんだと？ 久しぶりの休みはどうだったよ、楽しめた……か？」

何故かおじさんは僕を見て口をあんぐりと開けたまま固まってしまふ。いや、よく見ると、おじさんは僕を見てはいない。僕の隣にいる旅人さんを見ているのだ。みるみる内に停止していたおじさんの顔が驚きへと変わっていく。そして、奥にいたおばさんに言うのだ。

「か、母ちゃん大変だ！ ルー坊が彼女を連れて来たぞ！」

「なあに言っただい。それが本当だったら津波が来るくらいの冗談だね。……津波が来るぞー！」

「津波だー！」

「二人とも落ち着いて……」

話しにならない。それ以前に旅人さんがビクリしているので、二人を落ちつけることに。しかし、これがなかなか重労働だった。これは僕の日頃の行いのせいなのだろうか……。そうでないことを願いたい。

+++++

「ええ！？ 旅人さんって魔導騎士団の人だったんですか」

二人を落ち着かせ（ついでに誤解も解いて）、おばさんが夕飯を作ってくれているのを待っている時、ふとした会話でとんでもないことが発覚した。

魔道騎士団とは、腕っぷしのいい優秀な魔導士たちで構成された王国直轄の部隊である。魔物退治を始めとし、自警団や他の軍ではどうしようものような凶悪犯罪者、山賊及び海賊なども取り締まる。端的に言えば正義の執行部隊なのだ。王国の命令だけでなく、外部からの依頼も積極的に引き受けることから、政府御用達ギルドなんて呼ばれたりもする。

旅人さんは、その魔導騎士団の一員らしいのだ。

「そうだけど……そんなに驚くこと？」

いや、そんなに驚いて当然だ。魔導騎士団とは魔導士の集まり、魔導士とは勉強と鍛錬の末に魔法を扱えるようになった者のこと。魔法を使えるだけでも相当なものなのに、それだけでは騎士団には入れない。魔法を十分に使いこなす実力がなければいけないのだ。故に、騎士団はそう多くの人員を抱えていない。魔導士に会うのも難しいのに自分の町で、自分の住む場所で騎士団員に会うなんて最早奇跡の領域だ。

「いやーたまげたぜ」

豪快な笑い声でおじさんは笑った。

「しかし、騎士団員様がこの町に何の用なんだ？」

「ルカもおじさんも知ってると思うけど、『八番通りの殺人鬼』絡みでね」

八番通りの殺人鬼……。

僕は思わず呟いた。今、カタニーヤ中を騒がしている事件。『八番通りの殺人鬼』。八番通りを中心に五人もの人が殺されている酷い事件だ。殺した人数もさることながら、何より話題に上がったのは殺し方だ。一度殺した後、その死骸で憂さ晴らしでもしたのかというほど、発見される遺体はとんでもないことになっているらしい。どんな嗜好きでも、死骸の詳細を聞くと途端に押し黙るとまで言われているのだ。

「やっぱり、酷い事件だからって、自警団が騎士団に依頼したんですか？」

「そうなんだけど、あたしは用心棒的な意味で呼ばれたのよね。この事件、残虐さもそうなんだけど、注目すべきは被害者の全員が成人男性だって点なのよね。一番初めの被害者はともかく、二人目三人目は事件が有ったことを知っているんだから、用心くらいするでしょ？ それなのに五人もやられている」

「つまり、犯人は凄く強いかもってことですか」

「しかも魔導士かもしれないのよね。今日、ルカに会う前に自警団に行って情報を提示してもらったんだけど……このレベルでの人体

の破壊は例え犯人がどんなに力が強くとも、それが人間である限り無理な気がするのよ。だから、魔導士かなってね」

「それじゃあ、さっきの用心棒的の意味ってなんですか？」

「あたしは別に推理する為に呼ばれた訳じゃないってこと。あくまでそれは自警団の仕事で、あたしの役割は犯人確保よ。もし犯人がわかってても、滅茶苦茶強かったら対処のしようがないじゃない。よしんば捕まえられたとしても被害は笑い事じゃあ済まないわ。だから、あたしが、騎士団が呼ばれたのよ」

澄ました顔で淡々と意見を述べる旅人さんだったが、正直僕は話の殆どが何となくしか理解できないし、おじさんに至っては完全に右から左状態だ。もしかしたら右にすら入っていないかもしれない。「ほらほら、難しい話はお終いだよ」

おばさんがお盆を持って調理場から出てきた。

「はいよ、騎士団様員。ミルク貝のトマトパスタだよ。たと食べとくれ」

「……ミルク、貝？」

旅人さんは首を傾げてしまう。無理もない、ミルク貝とはここいらの海域でしか捕れない珍しい貝で、カタニーヤの特産品の一つだ。まるでミルクのようなクリーミーさが特徴の貝で、スナッフルズではそれをトマトパスタに入れて出す。トマトの酸味とミルク貝が絶妙にマッチする一押しメニューだ。流石おばさん、ナイスセレクト。「殺人鬼だか何だか知らないけど、あたしら町の住人からしたら迷惑なだけさね。それ食って元気つけて、さっさと捕まえとくれ」

「最大限努力はしますよ。それが任務ですから」

「頼もしい限りだねえ。ルー坊、あんたとエミリアの分もあるから、食べ終わったら二階に持ってってやりな」

「ありがとうございます」

一口パスタを食べた旅人さんが感嘆を漏らす様子を見ながら、僕もパスタを口に運んだ。

第一話『出会い』（2）

夕飯を食べ終え、姉ちゃんの分のパスタを持って二階への階段を上がる。

「ねえ、ルカ。お姉さんに会わせてもらってもいいかしら」

旅人さんが突然、そんなことを言い出した。

「いいですけど、どうして？」

「そりゃ、今日は弟さんにお世話になったし、これからもお世話してもらおうし」

「これからも……？」

「犯人が特定されるまではやることないから、しばらくはあんたに遊んでもらおうかなあってね。ちょっとお、何で嫌そうな顔してるのよ」

「嫌ってわけじゃないんですが」

僕は旅人さんから顔を逸らす。いや、本当に嫌ではないのだ。旅人さんというのは楽しい。でも、僕にはバイトという使命が……。

「もしかして、あの清掃のバイトのこと気にしてるの？ 残念だけど、あそこに来てるお偉いさんってのはかなり長い間滞在するみたいよ。南の国から避暑に来てるんですから」

「ほ、本当ですか！？」

だとしたら、僕は少なくともワンシーズンは厄介払いされたまま
いや、そんなに長い間なら、既にクビにされていてもおかしくない！ 大変だ。いそいで次のバイトを探さなくては！ アントンさんの所で働かせてもらうか？ 駄目だ、あそこは工場から遠い。

「困ってるみたいね」

「あ、当たり前ですよ」

「じゃあ、あたしが雇ってあげようか」

「はい？」

思わず目を丸くした。

「あんたはあたしに町を案内したり、とにかくあたしの暇つぶしに付き合う。で、あたしはあんたに報酬を払う。どう？　なかなかいい話だと思わない？」

「まあ、すぐにバイトが見つかるわけじゃないし、それまでの繋ぎだと考えれば非の打ちどころもないくらいいい話ですが……いいんですか？　そんなことに報酬だして」

「いいのよ。もっと大きい観光地では町案内で生計立ててる人だっているんだから、それに、騎士団って結構儲かるのよ。あんたには遠慮も異論も許されていないわ」

「それって拒否権ないってことじゃないですか」

ただ、確かに悪くない話ではないので僕は了承した。

決して、旅人さんと遊びたいが為ではない。断じて違う。多分。

「でも、相手できるのは工場の仕事が終わってからですよ」

「わかってるわよつ。さあて、どこ案内してもらおうかな。あたし

朝市とかに興味あるんだけど」

「人の話聞いてました？」

変な風にテンションの上がっていた旅人さんだった。どうやら僕は随分と好かれてしまったようだ。まあ、悪い気はしない。

話している内に姉ちゃん、そして僕の部屋に到着。二階の一番端の一室。旅人さんの泊まる部屋はこの隣だ。気を使って隣にしてやったぜ、とおじさんは僕に耳打ちしたが、何の気を使ったかは定かではない。まだ誤解が解けていないのかもしれない。ではなかった。

「入るよ、姉ちゃん」

軽くノックをした後、部屋の扉を開けた。ベットが二つと机と椅子が一つずつ。それと壁に小さな収納があるだけの質素な部屋。二人で住むにはいささか狭くもあるが、食堂は一階だし、生活の全てをここでまかなうわけではないので、特に不便はしていない。

「ただいま、姉ちゃん」

僕はベットで上半身だけを起こしていた姉ちゃんに声をかけた。机の上のランタンの灯りで姉ちゃんの艶やかな黒髪が照らされて

いる。その目には包帯が巻かれ、裸眼を見ることは叶わない。

「おかえり、ルーちゃん」

姉ちゃんは口元だけで微笑むと、ふと首を傾げてしまう。

「足音が二つ……？ お客さん？」

「そうそうお客さん。というか旅人さんかな」

僕は姉ちゃんに今日の出来事を伝えた。これは、お客の有無に関わらず毎日の習慣だったりする。

「初めまして、ルーちゃんの姉のエミリア・アルマーニです」

話しが終わると、姉ちゃんが自己紹介を始める。初めまして、と旅人さんも続いた。

「えっと……その包帯、もしかして今怪我してて療養中だったかしら。だとしたらごめんなさい、押しかけちゃって」

「いえ、違うんです。私、盲目なんです。包帯は、ほら、目が見えないから焦点が定まらなくて、それが恥ずかしいって付けてるんです」

「あ、そうなの……」

「おまけに下半身不随だったり」

はにかみながら、楽しそうに姉ちゃんは言う。とても障害を抱えている人の口調ではないが、実はこれ、わざと無駄に明るく言って、相手の反応を楽しんでるのだ。姉ちゃんのこの手の悪戯というか悪ふざけは毎度のことである。

「もう、姉ちゃんったら、旅人さんが困ってるじゃん」

「ふふふ、ごめんなさいね。気にしないでいいのよ。私、余命一ヶ月でもう死んじゃうから」

「え！？」

それくらいにしたら、と僕が呆れながら言っていると姉ちゃんは、はーいと子供のような返事をした。

「本当に気にしないでいいですよ。余命一ヶ月は嘘だし、姉ちゃんのこれはいつものことですから。ほら、姉ちゃん、今日のご飯はミルク貝のトマトパスタだよ」

「やったあ。私それ大好きっ」

椅子をベッドの横に寄せて、僕はそこに座る。すると音でわかったのだろう、姉ちゃんは僕の方を向いてあーんと声に出しながら口を開けた。目が見えないから仕方ないんだけど、そんなに楽しそうにされるとこっちが照れる。今日は旅人さんがいるから尚更だ。「あ、旅人さんはそのベッドにでも腰かけて下さい。見ての通り椅子は一つだけなんで」

自分で言った後に女の人をベッドの上に座らせるのはどうかと思いついたのだが、旅人さんは気にしてない様子。むしろ堂々とベッドに腰かけた。

「でもびっくりしたわー」

パスタを食べつつ、姉ちゃんはわざとらしく言う。

「まさかルーちゃんが彼女を連れてくるなんてねえ」

「彼女じゃないよ。さっき話したじゃん」

「うん、聞いてたよ。結婚を前提にお付き合いすることになったって」

「一体何をどう聞いてたんだよ……」

「あ、次は貝をちょーだい？」

相も変わらずマイペース姉ちゃん。僕はため息を吐きつつミルク貝を姉ちゃんの口に運ぶ。

「私ね、生まれたときから盲目で足が動かないんですよ」

すると突然、姉ちゃんは俯き加減に真面目なトーンになった。

「そのせいでルーちゃんには迷惑ばかりかけちゃって、この部屋の家賃も生活費も全部この子が稼いでくれてるんですよ？　だけど私は何もできなくて」

姉ちゃんはふっと我に返ったようにハッと顔を上げた。

「ち、違うんです。こんな重い話がしたかったわけじゃなくて、そうじゃなくて……つまり何が言いたいかというと　　こんな私を小さい頃からずっと支え続けてくれたから、だから、私の弟は凄くて偉いんだぞ、って言いたかったんです」

すいません、ブラコンなんです私。と姉ちゃんは続けた。

これもまた、いつものこと。姉ちゃんは悪戯や悪ふざけも好きだが、何より僕の自慢話が好きなのだ。恥ずかしいからやめてくれと言ったことはあるが、絶対にやめろとは言わなかった。たった一人の肉親にそんな風に言われることが嬉しくないはずがないのだ。後ろから旅人さんの笑い声が聞こえた。

「ルカのお姉さんだって言うから、どんな人なのかと思ってたけど、予想できないくらい面白い人ね。ルカも気に入ったけど、お姉さんも気に入った。あたし、アルマー二姉弟気に入ったわ」

旅人さんにそんなことを言われ、僕は何だか恥ずかしくなり、姉ちゃんはとても嬉しそうに笑った。

+++++

宿屋スナツフルズにはおばさんの料理の他にもう一つ名物がある。それは、大きな風呂だ。姉ちゃんにご飯を食べさせ、着替えを手伝った後、旅人さんにその話をするると早速入りたいと言うので、そこまで案内した。勿論だが僕と一緒に入るはずも入るはずもない。

僕は外で火の番をしていた。壁のくぼみにあるこの火床は風呂桶に直通していて、これで湯加減を調節するのだ。普段なら火の番はおじさんの仕事なのだが、そのおじさんに頼まれて今回は特別に僕がやることになった。おじさんが耳打ちで頑張れよ！と言っていたのだが、一体何を頑張ればいいのか僕には理解不能だった。

「ああ、いいお湯。最っ高！」

中から旅人さんの声が聞こえた。いつかあんちゃんが女の人は風呂が好きな生き物なんだと言っていたが、それは本当のことかもしれない。なかった。

「凄いわね、この、木で出来たお風呂。桶っていうのかしら？これ、東の国の技術でしょ」

「技術というほどのものではないですけどね。昔来た東の冒険者さんに作りかたを習ったんですよ」

ちなみに火を吹く道具はこの竹筒。何でも古の習^{いにしえ}わしで竹筒でなければいけないらしい。どうしてかは不明だ。

「ルカ」

「何ですか？」

「覗いたら殺すからね」

「覗きませんよ」

「へえ、こんな可愛い娘のお風呂を覗かないんだ。ヘタレねえ」

「言ってること滅茶苦茶なんですが」

ふう、と旅人さんが息を漏らした。湯船は久しぶりらしいし、かなりリラックスしているようだ。僕は竹筒で火を調節する。きちんとやらないと、すぐにぬるくなってしまふのだ。

「ルカ」

「こんどは何ですか？」

「いいお姉さんね」

唐突に姉のことを褒められ、僕は止まってしまった。

「お姉さん、凄く楽しそう。本当に心の底からあんだというのを楽しんでる。ただ現状を悲観するだけじゃなく、感謝してる。自分の運命を受け入れる。なかなかできないことよ？ それって。あんたも十分凄いけど、お姉さんも凄くて偉いわよね」

「……」

言葉が出なかった。自分でもビックリするくらい、どうしていいかわからなくなるくらい 嬉しかった。僕は嬉しかったのだ。たった一人の肉親を褒められて嬉しかったのだ。

そういえば、僕を褒める人は沢山いたが、姉ちゃんを褒める人はいなかった。そうか、もしかしたら姉ちゃんも僕が褒められる度に嬉しかったのだろうか。こんなにも嬉しかったのだろうか。それは少し、羨ましい。

「ルカ、どうしたの？」

「あ、そ、そうですよね。姉ちゃんは凄いですよね。だから、やっぱり僕って【幸福】ですよ」

「幸福？」

「はい。そりゃあ、こんなですから、生活は苦しいし、仕事や姉ちゃんの介護で休む暇もない。学校も行っていないから読み書きだつて殆どできません。しばらく遊んだ記憶もないくらい大変で……僕ら、七歳までは路上で生きてたんです。傍から見れば散々ですけど、でも僕は【不幸】なんかじゃなく【幸福】なんです」

凄くて偉くて優しい姉がいて、沢山の人が僕らを気にかけて、助けてくれた。沢山の優しさに触れてきた。こんな人生が【幸福】じゃなくて何なんだ。

「僕は　僕らは【幸福】ですよ」

静かな風が流れる。それは優しく、僕らを撫でる風。心地よい風だ。

ポチャン、と天井から水滴が湯に落ちる音が響いた。

「明日は、どこに行こうかしら」

まるで独り言のように旅人さんは呟いた。

+++++

当たり前のことだが、未来を知ることはいできない。

この奇妙な出会いが、後の世界に何をもたらすかなど、誰も知るよしはないのである。

第二話『契約』

旅人さんと出会ってから一週間が過ぎた。

一週間。それなりに長い間であるように思えるが、僕の感覚としてはあつという間だった。いつも通り仕事に勤しみ、いつも通りにバイトではなく、本来バイトであるはずの時間は旅人さんと遊んで過ごした。遊ぶ、なんてとても楽しげに聞こえるだろうが、仮にも報酬を貰う以上、旅人さんには楽しんでもらわなくてはいけない。これでもどこが一番旅人さんが楽しめるか試行錯誤したのだ。個人的にはヴォメラの丘のチョイスがなかなかどうして素晴らしかったと思う。時間帯も味方してくれ、なんと艶やかな夕日を拝むことができた。その、あまりの景色に帰り道は二人とも放心状態だったくらいだ。ただ、仕事と一線を引いてはいるものの、ついつい僕まで楽しんでしまい、時間の流れがとても速く感じてしまったのは失態だった。自分で言うのもなんだが、僕は結構真面目な性格なのだ。旅人さんと遊ぶ以外には目立った出来事は殆ど何もなかったと言っている。相変わらずお偉いさんは避暑から帰らないし、スナッフルズに宿泊客は来ないし、あんちゃんはうるさいし、そして八番通りの殺人鬼の犯人は一向に証拠すら見つからない。唯一変わったことは、アルマー二姉弟が旅人さんとかなり仲良くなったということだろうか。

そして、一週間目の今日この日、事態は思わぬ方向へと転がる。

運命はもう、刻々と動きだしていたのだ。

+++++

今日、旅人さんはご機嫌斜めだった。いや、不機嫌というわけではない。こう、落ち込んでいるのだ。それというのも、今日案内したエトネア広場からの帰り道に買った新聞の記事を見たときからだっ

た。そこには大きな文字で『八番通りの殺人鬼！ 六人目の被害者！？』と書かれていた。

「はぁー……」

一体何度目かわからないため息を旅人さんが吐いた。どこことなく宿全体の空気が重たい。決して旅人さんのせいではないのだが何なのだろう、この感じは。

「あたしはさあ、殺人鬼を捕まえる為にこの町に来たのよ？ それなのにあたしが来てから更に被害者が増えるなんて……」

「元気出してください。何も旅人さんが悪いわけじゃないんだから僕が旅人さんを励ますと、そうだそうだとおじさんも続いた。

「悪いのはさつさと犯人を特定しねえ自警団どもだ。待つてる騎士団員様。俺が明日にでも自警団の奴らにガツーンと」

「おじさん落ち着いて……」

おじさんが振り返りに遭う姿が目には浮かぶようだ。仮にもカタニーヤの町を守る自警団、おじさん一人ではガツーンと言うどころか、むしろガツーンとやられてしまう。

「なあんであたしはこんな毎日毎日遊び歩いてたのかしら」

言って、旅人さんは僕をじつと見つめる。

えっと……ん？

「それもこれも全部ルカがいい奴過ぎるからいけないのよ、まさかの責任転嫁だった。

僕が困惑していると、旅人さんは冗談よ、と先の発言を取り消した。

「でもさあ、やっぱり六人目の人に申し訳ないのよね。あたしが後悔したって何にもどうにもなんないのに」

「……元気、出してください」

それしか言えなかった。やはり、旅人さんには騎士団員としての誇りにも似た何かがあるんだろうし、それは僕がどうこう言うべきものではない。

しかし、ここまで犯人が捕まらないとは僕としても予想外だった。

犯人はただ強いだけじゃなく、頭もいいのかもしれない。

「そうだ、アントンとこにでも行つてくりやいいんじゃないかい？」

少しの沈黙の後、おばさんがそう提案した。

「たまにはウチの安い酒じゃなくて、いいもん飲んで来たらきたらどうだい。美味しい酒飲んで気持ち切り替えるつても悪くないさ」

アントン？ と旅人さんは首を傾げる。アントンさんは、一年ほど前にカタールに越してきた人だ。感じのいいお兄さんで、洒落たバーを経営している。都会の匂いを感じさせる落ち着いた店だが、九番通りに面していて、一〇番通りの利用者も多い。僕はよくあんなに連れられて行くのだ。

そこら辺の説明をすると、興味を持ってくれたようだ。旅人さんの表情が若干明るくなる。

「ふうん。あたしは安い酒のが好きだったりするんだけどさ、おばさまの言うとおり、たまにはそういうところでゆっくり飲むのも悪くないかもね よし、いくわよルカ」

「って、僕も行くんですか」

「当たり前じゃない。一人で飲んで何が楽しいのよ」

「でも僕、旅人さん来てから毎日のように付き合わされてるから、少し二日酔い気味で……」

「飲めば治るわ」

とんでもない荒療治である。

+++++

いつかも旅人さんが言っていたが、僕には拒否権はないようで、あつという間に連れ出されてしまった。久しぶりにアントンさんに会いたかったので、そこまで拒否しなかったというのもあるが。

太陽も完全に沈んでしまった夜。僕と旅人さんはそれぞれランタンを持って九番通りのアントンさんのバーに向かっている。旅人さんが首に掛けたランタンを使わずに別のランタンを使っているところを見るに、首のものは本当にただの飾りらしかった。何の火種も

入っていないようだし、まあ間違いないだろう。都会のオシャレという奴なのだろうか。後でアントンさんに聞いてみよう。

「そのお店って、沢山の種類のお酒が揃えてあるんだって？」

「はい。世界のお酒が飲める！　がキャッチコピーなくらいですから、かなり種類は多いですよ」

「楽しみねえ。エタノールあるかしら？」

「純度一〇〇%で頂くんですか！」

「何驚いてんのよ、それくらい飲んだことあるわよ。あれ、かなり効くんだけど、味は最低なのよね」

「そりゃ主に医療用ですからね……」

「てゆーか、普通に死ぬと思うんだが。旅人さんが酒に強いってことは知ってたけど、もしかしたらとんでもない強さなのかもしれない。」

「じゃあ、エタノール以外で好きな酒ってなんですか？」

「お酒なら大抵好きだけど、一番はラムね。でもなかなか売ってないのよねえ。西の国といえばラムなのに」

「確かにそうですけど、ラムはもっと海辺の、それこそ外海近くで一番飲まれてますからね。ここみたいにある程度王都が近かったりすると、手に入りにくいのは確かですね」

「どうしてかしら」

「航海に持っていくんですよ。主に海賊ですけど、長い旅じゃあ水は腐ってしまうんで酒を積むんです。ラムが選ばれる理由は安い奴はとことん安いからじゃないですかね」

「へえ。そうゆうことか　あたし水が腐るって初めて知ったわ」

「え？　旅人さんは旅の途中で水が腐ったりとか経験したことないんですか？」

「あたし、アルコールの入っていない水は飲まないのよ」

「あ、そうですか……」

「うむ。明日は確実に二日酔いだろう。今更だが逃げ出したくなってきた。」

カツカツと二人分の足音が響く。さすがに日も沈むと人通りも少ない。遠くの方で宴会らしき音が微かにするくらいで、とても静かだ。いかに観光都市といえど、眠らぬ町はないのである。

僕は姉ちゃんのこともあるので、あまり暗くなってからには出かけない。だから、何となく物珍しく、特に何があるわけにも関わらずキョロキョロと辺りを見渡していた。

「あの、さ」

すると、旅人さんが変に小さな声を出した

「あたし、あんたにちよつとした秘密があるのよね」

「秘密……？」

僕は首を傾げた。秘密、と言われても、僕は旅人さんのことで知らないことの方が多いだろうし、旅人さんにしても僕に対して知らないことの方が多いだろう。例え、どんなに僕が人間的に浅かったとしてもだ。

「そうゆうんじゃないのよ」

僕の考えてることがわかったのだろう（こういうわかりやすさが僕が浅い人間である証拠でもある）。旅人さんはそれを否定した。

「別にこれは話さなくてもいいことだし、あんたにしたって聞かなくてもいいことなのよ。だから、秘密っていうよりは、あんたに聞いてもらいたいことの方が近いかな。うん、そうだ。あたしはルカに聞いて欲しいの」

自ら確認するように旅人さんは言った。

「一週間。たった一週間だけさ、あんたとはそれなりの時間を過ごしたわけだし、あたし的にはもう堂々とルカのことを友達だって言い張りたいくらいなんだけど　その為には、あんたに聞いたってもらいたいことがある。言わなきゃいけないことがある。……だから、聞いてくれる？」

旅人さんが急に小さく見えた。彼女の不安そうな、そいでいて決意したような目に僕は驚きながらも、はいと返事をした。

沈黙が響く。さっきまでは何でもなかった静けさが今になって僕

に襲いかかった。

そして、旅人さんは口を開いた。

「あたしね 魔女なのよ。魔導士^{ウィザード}じゃなく魔女^{ウィッチ}。あたしが所属しているのは騎士団は騎士団でも、その中の一つ、【魔導騎士団 特異的異端戦闘部隊】。通称【魔女部隊^{サバト}】あたしはそこに所属している」

「……………へえー」

「……………」

再び沈黙が響いた。しかし今度のはどちらかというと気まずいだけのそれだった。

「へ？　そ、それだけ？」

旅人さんが裏返った声で言う。

「今の告白聞いて反応それだけ？」

「いや、でも、他にどう反応してよいやら」

何だかとても難しそうな単語が飛び交っていたのはわかったのだが、正直僕では理解不能だった。意味不明である。

「ルカ……　そもそもあんた、魔女がどうゆうものなのかわかってる？」

「魔女ですか」

魔女と言われても、僕にはよくわからない。確か、魔女は契約という不思議な儀式が行えるといった話はどこかで聞いたことがある。それに関しては割合有名な話なので僕でも知っていた。ただ真偽のほどはわからない。殆ど都市伝説のようなものなのだ。他は……。

「他は知らないですね」

「でも、魔女の噂くらいは聞いたことあるでしょ？」

「まあ少しなら」

「その中で、いい噂ってあった？」

「えっと……あれ、そういえばないですね」

大体が魔女が子供を攫ったのだといった悪い噂だったような気がする。まあ、その噂が真実であることは稀なのだが。根も葉もない噂はどこにだって現れるのだ。根も、葉も、ないくせに。しかしだからといって、悪い噂が殆どなのは事実。

「どうしてなんでしょ」

「……世間にとって魔女がそうゆう存在だったことよ」

怖いくらい低い声で旅人さんは続ける。

「魔女はね、神様に呪われた人間なのよ。それだけに、他の大多数の普通の人間たちからは疎まれる。ここ西の国、そして北の国、南の国、東の国が王都アースガルドによって一つにまとめられる一〇〇年前までは、どの国でも普通に魔女狩りが行われてたわ。今も魔女狩りこそないにせよ、魔女だからと迫害を受ける者だって少なくない」

魔女は異端者なのよ、そう旅人さんは言った。

「あたしはその魔女。人から疎まれ、蔑まされ、差別される存在よ。あんたは学がないからわかんないでしょうけど、おじさまもおばさまも古着屋のブルーノさんも、あたしが魔女だとわかれば態度をガラツと変えるわよ。これだけ言えば伝わったかしら、魔女って生き物のことが」

「まあ、何となく雰囲気はわかりましたけど……やっぱりわかんないですよ。旅人さんがどうしてそんな不安そうに喋るのが、わかんないですよ」

魔女のことはわかった。なるほど確かによくよく考えてみれば、魔女に対して僕もいい印象を持っていなかったような気がする。軽蔑まではいかないが、好き好んでいたわけじゃない。

だけど、しかし、だからこそそれがどうしたっていうのだ。「だって、どんなに魔女が悪い存在でも、旅人さんは悪い人じゃないじゃないですか」

僕の知ってる旅人さんは、ちょっと大雑把で破天荒で口も悪かったりして、でも誰とでも仲良くなれる優しい人だ。優しくて、いい

人だ。旅人さんは僕が気に入ったなんて言っているが、僕だって旅人さんのことが気に入っているのだ。

突然、嵐のように現れ、人の心にノックもせずに入り込み、気づくとそのまま居座ってしまっている。そんな旅人さんが僕は好きなのだ。

「だからそんな、不安そうな顔しないでくださいよ。旅人さんはもつとこう、ふてぶてしいくらいが丁度いいですから」

「……………」

「ほら、笑って笑って。笑う門には河豚フグがくるですよ」

「河豚が来てどうすんのよ」

「刺身にしましょう」

「お酒に合いそうではあるけどね。……………本当、誰がふてぶてしいよ。まったく」

何故だかとても嬉しそうに、旅人さんはため息を吐くのだ。

「あああ。なーんか拍子抜けしちゃった。あんた相手に悩みなんて持つもんじゃないわね。ほんの数秒前までの自分のテンションが恥ずかしいわ」

いつもの調子を取り戻しつつ旅人さんは笑う。とてもとても楽しそうに嬉しそうに笑う。

「まさかこんな町で友達ができるなんてね」

第二話『契約』（2）

僕が魔女について良い印象はもってないにせよ、比較的悪い印象も持っていない理由がわかった。ああ、そういえば僕の周りには魔女は悪くて怖い奴なんだと、そんな風にものを教えてくれる人なんていなかったのだ。この年になって人から聞いたことを素直に鵜呑みにするわけもなく、僕はそのまま、魔女の印象が何故だか悪い噂ばかりある人というだけになってしまったのだ。

今更認識を正す必要もないが、一応、一般常識として魔女は世間から嫌われているのだと覚えておこう。

勿論だが、それで旅人さんへの認識が変わったりはしない。しかし、そんな当たり前のことで旅人さんは驚くほど喜んでくれた。おかげで僕は正式に旅人さんと友達になれたようだ。そのことを思えば、一般常識なんてなくてよかったな、と僕がとんでもないことを思っている、不意にアントンさんが僕に話しかけた。

「どうしたんだイルカ君。妙に嬉しそうな顔をしてるけど」

すると、僕の隣でウォツカを瓶で頂いている旅人さんが首を傾げる。

「なーんかにやにやしてるわよ。飲み過ぎでおかしくなった？」

「僕はむしろおかしくならぬ旅人さんがおかしいと思いますけどね」

「あたしはいいのよ。だつてあたしだもん」

「ああ、はい。そうですね……」

アントンさんの店に着いてから既に一時間が経過しようとしていた。来る前から二日酔い気味だった僕は三〇分もしない内に限界が来ていたが、旅人さんとアントンさんが意気投合して互いに酒を酌み合い始めてしまったので帰れなかった。何度も逃走を試みてはいののだが、その度に旅人さんに取り押さえられてしまつて逃げ出せない。魔女部隊サバトというのが、一体どういふ部隊なのかわからないが、

やはり騎士団は騎士団。僕なんかいくら抵抗しても旅人さんには手も足も出ないのだ。

いや、しかしどうして僕は残ってはいけなのだろう。もう二人で勝手に飲んでいてほしい。僕には明日も仕事があるのだ。それに早く帰らないと姉ちゃんも心配する。そして何より体力が限界だ。

だが、もう抵抗する気力すらも失った僕は机に突っ伏した状態で楽しそうに語る旅人さんとアントンさんを見た。

旅人さんは本当に誰とでも仲良くなれる。

魔女。それがどういうものなのか知りたくなった。彼女があそこまで不安そうに苦しそうに、そうしなければ打ち明けられないようなもの。

魔女。

ウィッチ。

彼女は一体、何を恐れていたのだろう。

一体、何が苦しかったのだろう。

「ルカ」

旅人さんが僕を呼んだ。

「どうしたのよ。黙りこくっちゃって」

「見てわかりませんか……ルカ・アルマーニは大変お疲れなのです」

「……いつも喋ってばっかのアンタが静かだと、落ち着かないわねえ。仕方ない、今日はもう帰りましょうか」

「え？ いいんですか!？」

「途端に嬉しそうになったわね……。ま、確かに散々連れまわしたことにについては悪いと思ってるのよ。それに、明日からあたしも調査に参加することにしたから。八番通りの殺人鬼のね」

「旅人さんが参加するんですか？ どうしてまた」

「これ以上黙って見ていられないのよ。あたしにできることなんか殆どないだろうけど、それでも動かないよりはマシだからね。もう、

犠牲者は出させないわ」

きりつと、騎士団の顔になる旅人さん。とても今の今まで飲んだくれていた人とは思えない。こういうところを見ると、旅人さんは本当に魔導騎士団員なんだと思う。

同時に、やっぱりこの人はいいい人なんだと、そう思うのだ。

「そうか、もう行ってしまうのか。俺はまだまだ飲み足りないんだがね。こんどはラムも用意しておくから、また来てくれ」

残念そうにアントンさんは言った。この人もこの人でかなり飲んでいたはずなのだが、旅人さんほどではないにせよ、アントンさんも酒豪なのでまだ足りないというのは本当だろう。それでなくともこの二人、かなり気が合っていたからなあ。

「ありがとう。ここのお酒、なかなか美味しかったわ。今度ルカとまた来ることにするわよ」

僕が来ることが決定していた。やめてほしい。

「そうだね。来れる、ものならね」

アントンさんが言った。僕は首を傾げてしまう。

一体それはどういう……。

その瞬間だった。旅人さんが倒れた。

ガタン、と椅子を揺らして、旅人さんは床に崩れた。そして、横になったまま立ち上がるうとしない。酔っぱらって目まいでもしたのだろうか。そう思ったその時、宿で感じた空気の重さが、よりはつきりとしたそれとなり僕の肩にのしかかった。倒れそうなくらいの感覚に僕はまず驚き、そして違和感を覚えた。

旅人さんが酔っぱらう？ 彼女は毎日スナッフルズで酒を飲んでしたが、僕は旅人さんが酔っぱらった現場を見たことがない。彼女の酒の強さは目を見張るものがある。その旅人さんが、この、たった一時間足らずの晩酌で酔っぱらった？ それは、有り得ない。

「た、旅人さん」

呼びかけるが、旅人さんは返事をしない。驚きと苦痛の入り混じった顔で、ただアントンさんを見上げていた。

「何を……したの？」

僕の方を見ようとせせず、彼女はアントンさんに問いかける。

「何って、毒だけど」

そして、必然のようにアントンさんはそう答えた。

な、今、毒って……。

「ああ、畜生。ウオツカ何本飲めば気が済むんだ。こっちは度数の低い東の酒で繋いでたつてのに、正直キツイつつの」

普段の物腰柔らかな彼からは想像できない、刺のある台詞を呟きながら、アントンさんは立ち上がった。

「ま、キツイのはあんたの方が　騎士団員様」

旅人さんは体を起こそうと試みるが、上手くいかない。まるで彼女のいる場所だけ地面が傾いてしまっているかのように、すぐにまた倒れてしまうのだ。

旅人さんの様子を見て笑い声を漏らしたアントンさんは、馬鹿にした風に彼女に告げた。

「やめとけよ。あんたに盛った毒はマジックツリーの花粉。無味無臭で致死性も即効性もないが、確実に体の自由を奪う。どう足掻いたって無駄だ」

「……それで？　これは一体何の真似なのかしら」

「いやそれがよ。あんたが今引き受けてる仕事の犯人、実は俺なんだわ。俺が八番通りの殺人鬼なんだ」

突然の告白。僕も旅人さんも驚くことしかできない。

「自警団の容疑者リストには、あんたの名前はなかったんだけどねえ」

「はっ。あんな奴らの捜査を信用してるのか、あいつらは駄目だ。みんな殺人鬼にびびっちゃまってまともな捜査なんかできちゃいねえんだ。おまけに八番通りで起こってるから犯人は八番通りのいると決めつけてやがる。ここ、九番通りでも十分八番通りは近いのにな」
本当に馬鹿だよ、あいつら。アントンさんはそう言って、嘲り笑う。

「迂闊だった……」

旅人さんは悔しそうに齒を食いしばる。その様子を見て、アントンさんは更におかしそうに笑った。

「いやしかし、ありがとうよルカ。自警団は無視しても問題なかったが、流石に騎士団に嗅ぎまわれると厄介だからよ。何とかして殺せねえかと思ってたら、お前がその騎士団員様を連れてきてくれた。おかげで苦勞せずに殺せるよ。馬鹿でありがとうよ、ルカ・アルマーニ」

「な、何だよそれ……意味わかんないよ」

理解が追いつかない。まるで、現実において行かれているようで、「だ、大体！ アントンさんは何でこんなことを」

「俺はさあ、魔導士なんだよな。一時期は魔導騎士団にスカウトされるくらいの実力だったんだ。当然蹴ったがな。俺は俺の魔法を極めることにしか興味が無い。騎士団の称号なんて邪魔なだけだ。それでこの町に来て、人知れず研究を続けていたわけだが、やっぱり魔法つてのは試さなきゃ始まらねえ。だからそこら辺の奴で実験していたんだ。ああ、勘違いするなよ？ 何も無差別に殺してたわけじゃねえ。きちんと好き嫌いで分けてたさ」

にやにやした笑みを浮かべながら、アントンさんは自慢気に語る。人を殺したことを、自慢するように。

「好き嫌いって、そんな理由で殺したのか……！」

「んん？ 何だぁお前。もしかして怒ってんのか、見ず知らずの他人の為に怒ってんのか」

怒っているかどうかはわからない。ただ、むかつくことは確かだった。

「ははは」

アントンさんがわざとらしく笑う。

「俺はよ、お前のそういうところが嫌いだったよ。この偽善者が、お前ほど不幸を知っている奴はそうそういない。にも関わらずお前は優しい。辛い経験をしたから優しく育った？ 馬鹿か！ 辛い経

験をした奴は歪んで育つのさ！ だから俺はお前が嫌いだぜ、ル力。勿論、その騎士団員様も同じだ」

だから、殺してやるよ。

アントンさんが言い放つ。ひっ、と僕は悲鳴を上げて後ずさりをした。その時に足がもつれ、床に尻もちをついてしまう。

「はっはは。まあいいじゃねえの。この俺の研究の礎いしずえとなれるんだぜ？ それに安心しろル力。お前は後だ。まずは騎士団様からだ」

アントンさんは人差し指を上突き出した。

「風よ、回れ、竜巻になり、対象を切り刻め！」

すると、アントンさんの指の先に人の頭ほどの大きさの竜巻が発生した。

あれが、魔法！

キリキリと甲高い音を立てて風は回る。

「《風喰らい》！」

アントンさんの声と共に竜巻が旅人さん目掛けて飛んでいく。渦の中心が何かを喰らう口のように旅人さんに向かい一直線に飛んでいくのだ！

「ぐっ」

小さい声を上げて旅人さんは横に飛んだ。迫りくる風から逃げようとしたのか……だけど、間に合わない。

「ああああ」

旅人さんの悲鳴。それに合わせて、ぐじゅぐじゅと不快な音が響いた。旅人さんの血が、肉が、辺りに散らばった。たった一撃の竜巻で彼女の足は真っ赤に染めあがってしまった。

何だ、あの竜巻。普通じゃない。渦の中心が旅人さんの足に食らいついた瞬間、まるで内っ側にひっくり返したドリルのように旅人さんの足を傷つけたのだ。幸いにも竜巻はすぐに消えたが、もうちょっとと長く残っていたら、彼女の足は跡形も無くなっていたことだろう。

「へえ、毒くらって動くのか。なかなかの根性だけどよ、足をやら

れちまったら、毒とか関係なしにもう動けねえよな」

言って、再び人差し指を上突き出す。

まずい、本当に殺されてしまう。毒で体の自由を奪われた旅人さんは魔法で反撃することもできない。詳しくは知らないが、魔法はとても繊細で高度な技術なのだ。ただ、詠唱すればいいというわけではない。ましてや、今の彼女では使えるはずもない。旅人さんが殺されたら、次は僕が……。

死。

それを背後に感じた。その痛いほど冷たい感触に僕の体は震え上がる。

死ぬ。殺される。死、殺、死死殺殺死死……

。

気づくと僕はアントンさんに向かって傍にあつた椅子を投げた。彼の詠唱が中断される。

「がっ、糞餓鬼があ！」

その暴言を無視して僕は旅人さんに近づき、彼女を抱え上げた。死にたくない。死になくなかった。こんなところで僕は死にたくない。

旅人さんを担いだまま、僕は店から飛び出した。

第二話『契約』（3）

いつか旅人さんは言っていた。大多数から好かれている僕は凄いのだと。でも、それはどうしたって大多数であり、残った大少数からは決して好かれることはできないのだ。

はあはあ、と自分の荒い息が響く。店を飛び出したはいいが、これからどうすればいい？ 誰かに助けを呼ぼうにも、それはきつと悪戯に犠牲者を増やすだけだろうし、そんなことより何よりも旅人さんの傷が心配だ。こうしている今にも彼女の足からは血が流れ続けている。顔には毒の影響か、大きな隈ができていた。

「ル……力」

すると、消え入りそうな声で旅人さんが僕の名前を呼んだ。

「逃げ、なさい。一人で、あたしを置いて逃げなさい……あたしの不甲斐なさのせいで、あんたまで死なすわけには……」

「何言ってるんですか！ 一緒に逃げるんですよ！」

「駄目よ……あたしを抱えたままじゃ、あいつに追い付かれちゃう」
旅人さんの言う通りだ。人一人抱えたままでは、アントンさんに追い付かれてしまう。あまり長い距離を走るわけにはいかない。どこかに身を隠さなければ。

「ごめん、ね」

旅人さんは言った。泣きそうな声で言った。

「あんたといるのが楽しくて、つい、遊び過ぎちゃった……。あんたといると、普通の女の子になれた気がして、嬉しくて。馬鹿よね。あたしは魔女なのに、呪われているのに、普通になんかねるはずなのに……」

「だから、わかんないんだよ！ 魔女とか呪いとか、わかんないんだよ。あんたがどうして普通じゃいけないのか、嬉しいといけないのか、そういうの全部わかんないんだよ！」

だって、魔女が怖いと教えてくれる人はいなかったのだから、魔女が楽しいといけないと教えてくれる人もいなかったのだ。

「二人で逃げますよ。僕は絶対にあんたを置いていくもんか」

「言うこと聞かないと、殴るわよ」

馬鹿を言え。もう殴る気力もないくせに。

助けもそうだが、まずは旅人さんを医者に診せなければ。駄目だ、ここからじゃ病院は遠い。それじゃあ、あいつに追い付かれる！

くそ、とにかく止血だけでも。そうだ、宿だ。スナツフルズだ。確か僕らの部屋に救急箱が有ったはず。治療は無理だが、血を止めるくらいならできる。

「待つててください」

僕は一層早く九番通りを走り抜けた。

+++++

スナツフルズの灯りは消えていた。もう、おじさんもおばさんも寝てしまったのだろうか、姉ちゃんのいる部屋の窓は正面からは見えないのでどうかはわからないが、姉ちゃんのことだから起きていて、僕らへの悪戯でも考えているのだろう。生憎だが、そんな暇はない。

鍵のかかっていなかった扉を開け、階段を駆け上がる。そして、やはり灯りの点いていた部屋に入る。

「姉ちゃん！」

「あら、そんな大声出してどうしたの？ ルーちゃん」

「い、今旅人さんが……」

旅人さんが大変だと、そう言おうとして止まった。僕の目にとんでもないものが映ったからだ。

「そうそう今ね、“アントンさん”が来ているのよ？ ちゃんと挨拶しなさい」

アントンがそこにいた。窓際にやにやと笑いながら、奴は存在していた。

「よう、ルカ」

「何で……あんたがここに！」

いや、待て。思い返してみる。どうして玄関に鍵がかかっていなかったんだ？ それはつまり、そういうことだろう。どうして僕はそんなことにも気が付かないんだ。

「ここで待つてりやよう、お前は自分から来てくれると思ってたぜ。帰巢本能って奴か？ どうでもいいが、やっぱお前馬鹿だな。お前がどんなに馬鹿でも俺あしらねえが……馬鹿も大概にしねえと、自分の命すら守れねえぜ？ こんな風にな」

そう言つて、アントンは右手を突き出す。その手には何か不可思議な球状のものがあつた。

まさか、また魔法……！

「この魔法の名前は《暴風息》。さっきの《風喰らい》と違って、まだまだ未完成だが、いつも以上に魔力を込めた特注品だからなあ。多分、エミリアもろ共、お前らを吹き飛ばせるだろうよ」

「姉ちゃんは関係ないだろ！」

「ああ？ いいじゃねえか、そんな役立たず。お前だつてそいつがいない方が幸せになれるぜ。毎日毎日あくせく働いて、そんな役立たずの為にその金を使うなんて馬鹿らしくならないか？」

「そんなわけない、僕は好きでやってるんだ！」

「なら俺は好きに殺すとするさ」

「ま、待つて！」

旅人さんを横に寝かせ、僕は膝を着き頭を下げた。

「お願いだから、僕なら何をして構わないから、だから、姉ちゃんだけは……！」

「……例えば、その騎士団員の命を差し出せば姉ちゃんを救つてやるぞつて言つたら。おめえ、どうするよ」

旅人さんと引き換えに姉ちゃんが……？

僕は視線を二人に向けた。毒と足の痛みと戦う旅人さんと、状況が掴めず慌ててている姉ちゃんに。

姉ちゃんと旅人さん。

「差し出すよ。それで、姉ちゃんが助かるなら」

僕は言った。本心を、ありのままを言葉にした。痛いくらいに床に頭を押し付けながら。

「はっ、ははっ。はははははは！」

アントンの笑い声が部屋に響いた。

「そうだよなあ。そんな最近出会ったばかりの女なんかよりも姉ちゃんの命の方が大事だよなあ？　そうだろうよ。そしてそれでいいんだ。お前はそうあるべきだよ、ルカ・アルマーニ。気取ってねえで、もっと早くからそう生きればよかったんだ。いいぜえ、お前。

……ただ、足りねえな」

足りない、とアントンは繰り返す。

「確かにいつものお前からすりゃあ、幾分かマシだがな。それで懇願するのがめえの命ならよかったが、お前が望んだのは姉の命だった。友達よりも自分よりも姉の命を欲した。言っに事欠いてあんな役立たずの命を見逃してくれだあ？　嫌に決まってるだろ、馬鹿野郎」

「お、お前！」

「何だ？　言いたくないことを言われたって怒る気か？　言いたくないことってのは確かだろうが、それはお前の本心じゃないのかよ」

「……！」

何も言い返せない。だって、確かに僕は旅人さんなら死んでもいいと、そう思っただけ、そう言ったのだから。

「これが最後だ、ルカ・アルマーニ。その役立たずと騎士団員様を差し出せ、そしてお前は俺の助手になれ、命を助けてやるから、俺の為にめえの為に生きろよ。さあ、どうする？」

「それは、できない」

「あっそ、なら死ねよ」

アントンの手の球体が爆散し、僕らは大きく後ろに吹き飛ばされ

た。

+++++

一瞬だが、僕は気を失ったようだ。気が付くと僕はスナッフルズの裏の路地に吹き飛ばされていた。背中が痛いということは僕は背中から地面へと叩きつけられたのだろうか。起き上がってみたが、背中の痛み以外は特に何もない。上手く地面へ激突できたようだった。

「！　そうだ、姉ちゃん」

辺りを見渡すと、すぐに姉ちゃんは発見できた。迷うことなく僕は姉ちゃんに駆け寄り　そして言葉を失った。

姉ちゃんの腹には見るも無残な大穴が空いていたのだ。

「ね、姉ちゃん！」

呼びかけるが、当然返事はない。息はしているが、それも虫の息だった。どうして僕が無傷なのに……！　理由はすぐにわかった。姉ちゃんが一番アントンの近くにいたからだ。だから《暴風息》とやらの影響を一番に受けた。

ドクドクと血が流れ続けている。姉ちゃんの血が流れ続けている。わかることは一つ、このままだと姉ちゃんは確実に死ぬということだ。

「う、嘘だろ……」

『おかえり。ルーちゃん』

「やだ、目を覚ましてよ」

『ねえ、今日はどんなお話し、聞かせてくれるの？』

「姉ちゃん！　返事してよ、姉ちゃん！」

そもそもあたしは回復魔法は使えないの。あれは、かなり高度な魔法だから」

そんな。それじゃあもう、姉ちゃんは。

途端に僕は奈落に突き落とされたかのような気持ちになった。目の前に傷ついた姉ちゃんがいるのに、何にもできないなんて。

「でも、助ける方法、あるわよ」

旅人さんが僕の目を見て言った。

「あるんですか？　こんな状態でも助けられるんですか!？」

「助けられるわ。たった一つだけど、方法はある。……あたしと、魔女との契約よ」

「契約？」

何度か噂で耳にしたことのある言葉だ。

「契約。魔女との血の契約のことよ。契約をした人間は魔女の所有物になる代わりに人智を超えた力を手にすることができる。そして、願いを一つ叶えることができるのよ。願いの条件はただ一つ、それが自分じゃない誰かの為の願いであることよ。だから、あたしと契約すれば、エミリアを救うことができるわ。あんたがそう望めばね」

「じゃあ早くそれをやりましょう！　契約でも何でも構いませんから……！」

すると突然、旅人さんが僕の肩を掴んだ。

「後悔するわよ」

鋭い口調で、鋭い視線で彼女は言う。

「あんた絶対に後で後悔する。泣きたくなくて、死にたくなくて、あたしを殺したくなるわ。それでもいい？　他の全てを投げ打つても、それでもあんたはエミリアを助けない？」

その気迫に気圧され、僕は言葉に詰まる。

第二話『契約』（終）

いつか、僕は旅人さんに言った。僕らは【幸福】なのだと。

生活は苦しい、仕事や姉ちゃんの介護で休む暇もない。学校も行っていないから読み書きだって殆どできない。しばらく遊んだ記憶もないくらい大変で、七歳までは路上で生きてきた。傍から見れば散々で、本当に散々で、でも僕は【不幸】なんかじゃなく【幸福】なんだと、僕は言った。でも、そんなわけがないだろう。

凄くて偉くて優しい姉がいて、沢山の人が僕らを気にかけて、助けてくれた。沢山の優しさに触れてきた。だから何だっていうのだ。それが、そんなことが僕が【不幸】じゃない理由になるわけがない。

僕は 僕らは【不幸】だった。

当たり前だ。鼠を食べて生きてきた子供が【幸福】なわけがない。確かに沢山の優しさには触れてきたが……僕は知っているから、彼らの、人間の本質を知っているから。僕らがまだ路上で生活していた頃、この町の住人が僕らを見ると、決まってみんな目を逸らすのだ。気味が悪いと、見ることを拒否するのだ。僕は僕らから目を逸らした奴の顔をはつきりと覚えている。その中におじさんやおばさんやブルーノのあんちゃんがいいたことも、はつきりと、覚えているのだ。

今更になって善人ぶって助けて恩を売りやがって。ふざけるな。僕らが一番辛かったときは手を差し伸べなかったくせに、見ようともしなかったくせに。だから僕は本当はあの人達が大嫌いだ。

僕は【不幸】だった。おまけにアントンの言う通り歪ゆがんでいる。歪ゆがんで歪ひずんで滅茶苦茶だ。

ただ、それでも、僕は【不幸】だったけれども、決して【不幸せ】ではなかった。僕はずっと【幸せ】だったのだ。姉ちゃんがい
たから。僕の歩んできた道には苦しい時と辛い時と泣きたい時しか

なかったけれど、いつだって姉ちゃんは傍にいてくれたから、見えるはずのない目で、いつだって僕を見ていてくれたから。きつと、姉ちゃんがいなくなったら幼い僕は生きようとも思わなかっただろう。

僕が姉ちゃんを支えてきたことは事実だが、僕を支えてくれたのは姉ちゃんなのだ。

「どうするの。やるの？ やらないの？」

変わらぬ視線で僕に旅人さんは問いかける。お前は姉を救いたいかと。それに、僕は答えた。迷うことなく。

「僕は　姉ちゃんを救いたい。姉ちゃんが救えれば、全部投げ打つてもいい、他に何もいらない、全部いらない。後悔してもいい、泣きなくなってもいい、死になくなっても、あんたを殺したくなっても構わない。それでも僕は姉ちゃんを救いたい！」

ともすれば悲痛のようにも聞こえる僕の叫びに旅人さんは少しだけ微笑んだ。

「僕と契約しろ、魔女」

「わかったわ。なら、後悔しなさい」

言った瞬間、旅人さんの手が僕の左胸を貫いた。そのまま、心臓を握られ、それをもぎ取られた。穴の開いた左胸から血が噴き出す。旅人さんの手の中で僕の心臓は脈を打っていた。

「な、何を……」

「言っただでしょ、契約とは魔女の所有物になること。だから、あなたの心臓も魂もあたしのものなのよ」

それだけ言っつて、旅人さんは鮮血の滴る僕の心臓を自らの口に放り込み、“ゴクン”と飲み込んだ。

「ゲロ不味う。まあ、美味しいわけないか。さあて、契約完了。おめでとうルカ、あんたは今日からあたしのモノよ」

にやり、と邪悪そうな笑みを旅人さんが浮かべた瞬間、痛みが消えた。見ると、左胸には傷痕すら残っておらず、代わりに何かの模

様が刺青の如く刻まれていた。

一体どうということだ……？ 首を傾げるが、そこで僕は気づく。

「姉ちゃん！」

そうだ、姉ちゃんだ。姉ちゃんの傷は……！

視線を下に向けると そこには傷一つない腹をした姉ちゃんが横たわっていた。さっきまで穴の開いていた部分に触れるが、ただ柔らかく暖かいだけだった。

「……どうやら、上手くいったようね」

旅人さんがほつと胸を撫で下ろした。姉ちゃんは目を開けないが、気を失っているだけだろう。呼吸はしているので、大丈夫なはずだ。「さて、問題はあんたが何を失ったかってことなんだけど」

言葉も交わさぬまま、僕と旅人さんはほぼ同時に同じ方向へと振り向いた。足音が聞こえたのだ。無論、こんな場所をこんな時間に通る人などいない。これは、奴の足音。

途端に怒りが込み上げてきた。よくも、よくも姉ちゃんを！

それが顔に出ていたのだろう。旅人さんが僕の肩に手を置いた。

「あたしに任せなさい」

言って、彼女は立ち上がる。アントンを見据えながら。

「……おいおい」

ある程度の距離まで来ると、アントンは驚きを漏らした。

「どうして毒を盛って足をやったはずの騎士団員様は立ち上がって、その他の雑魚も無傷なんだ？」

「さあ？ ル力が無傷なわけは知らないけど、あたしは多分、契約をしたからでしょうね。理由も原理も定かじゃないけど、どうやら契約の影響で毒も傷も治っちゃったみたい。大方、神様が生きろって言っているんじゃないかしら、慈悲とは違う意味でね」

はああ、と旅人さんはらしくないため息を吐く。

「なあにやってんだろうなあ、あたし。こんなくだらない町でくだらない任務して、くだらない悩み持って、くだらない友達作って、その友達の為に本気で怒ってるあたしって、本当にくだらないわ」

でも嫌じゃない、と旅人さんは笑うのだ。

「言ってる意味がわからねえが。んん？ 契約ってことはお前、魔女か。ははは、こりゃあいい！ 前々から魔女って奴に会ってみたかったんだが、まさかこんな餓鬼だとはなあ！ ええおい。空飛ぶ箒は持たなくていいのかよ」

「生憎、そんな古い伝統に従うつもりはないのよ」

旅人さんが首から提げたランタンに自分の手をかざした。

「死を覚えし幼子達よ。おさなこその業の炎にて、我がランタンに火を灯せ！」

言葉の後、何の火種も入っていなかったランタンにオレンジ色の火が灯った。

「成程、魔法が使えるってこたあ、確かに毒は抜け切ったみたいだな。しかしよお、そんな古ぼけたランタンに火を灯してどうなんだよ」

「灯りがあれば、足元が見える。前が見える。守るものも見える。」

それに、全く意味のないわけじゃないわ。これは魔導具の一種であたしの魔力を高めてくれる。あんたに対して使うまでもない代物だけど、まあ一応ね」

「はつ。ほざけよ！」

叫んで、アントンは詠唱する。発動する魔法は竜巻。旅人さんの足を喰らった奴だ。

「《風喰らい》」

旅人さんを喰らおうと竜巻は大口を開けて飛んでくる。彼女はその場から微動だにせず、ただ迫りくる竜巻を横から手の甲ではたいた。驚くことに、たったそれだけで竜巻はパンという情けない音と共に消えてしまったのだ。そして、一番驚いていたのはアントンだった。

「な、てめえ何をした！」

「何って、見ての通りただ手をはらっただけよ」

「何だと……」

「違和感に気づいたのは最初の一撃を受けてから。あの魔法、あたしの足を傷つけた瞬間消えたでしょ？ でも、それっておかしいわよね。あれだけの威力を持った風がそんな簡単に消えちゃうなんてだからそのあと、毒と痛みと格闘しながら、考えてわかったの。あなたの魔法には精密さがまるで足りてないってね」

荒いのよ、あんたのは。旅人さんはそう続ける。

「高密度の風を高速回転させることで竜巻の中心に鎌鼬かまいたちの巣を作る。確かになかなかいい魔法よね。騎士団からスカウトがくるのも頷けるわ。でも駄目、あんたの《風喰らい》は威力と派手さばかりに気を取られて不安定なの。だから、何かにぶつかっただけで消えてしまう。対処法は簡単。こう、手で鎌鼬のない外側をはたいてやれば、それだけで消えちゃう。それがあんたの魔法よ」

「そんな馬鹿な！」

「馬鹿なのはあんた。今まで六人にも試しておいて気が付かなかったの？ 何が自分の魔法を極めることにしか興味がないよ。聞いて呆れるわ」

すると、アントンは再び人差し指をかざした。己の力を誇示するが如く。

「か、風よお！ 回れ、竜巻になり、対象を切り刻めえ！」

先程のものよりも一回り大きい竜巻が生まれた。多分、あれが奴の全力なのだろう。素人の僕からしたら、縮み上がるほどの迫力だが、何故だか旅人さんが負けるとは思わなかった。

迫りくる竜巻。今度の旅人さんは一步後ろに下がったただけだった。無論それだけで防げるはずがないが、そもそも竜巻は旅人さんの直前で自然に消滅してしまったのだ。

「そして、これがこの魔法のもう一つの弱点。不安定なあんたの風はこの程度の距離しか存在することができない。さっきの《暴風息》って魔法にしたってそう。あたしやル力が無傷なのにエミリアだけが風穴開けられていたのはそのせいよ。でも、これは気が付かなくても仕方ないわ。だってあんた、今まで至近距離からしかこの魔

法を使ったことがないんですもの。にこにこ友達のフリして近づいて　そうやって全員殺してきたんでしょう？　何が魔導士。ふざけんじゃないわよ！　あんたは人を殺したかっただけのただの殺人鬼よ。人ですらない鬼が、魔導士を名乗るな！」

旅人さんの啖呵にアントンは明らかに怯えを見せる。

しかし、こうなると二人のレベルの違いを思い知らされる。たったこれだけのやり取りで、だ。今までアントンさんが気が付かなかった弱点とやらに、たった一撃喰らっただけの旅人さんは気づいた。これはもう実力以外の何物でもないだろう。……いや、実のところは違うのかもしれない。だって、アントンは弱点に気づこうとしてもいなかったのだから。

ちっばけな自尊心を抱え、深い谷の下で他人を見下し驕り高ぶり、空を見上げようともしなかった彼の大敗だ。

「黙れ黙れ、黙れえ！」

メッキを剥がされたアントンは半狂乱になりながら叫び、喚き散らす。

「魔女のくせに、呪われているくせに、生意気なんだよ！　お、俺を見下すな、俺は強いんだ。魔女なんか、魔女なんかにい！」

「るっさいわねえ。ギャーギャー騒ぐのは勝手だけど、あんまし大口開けてると、舌燃えるわよ」

炎よ、と旅人さんは小さく呟く。すると、掌ほどの大きさの炎がランタンから漏れ出し、アントンの口に入り込んだ。

「があああああああ」

「ほうら。言わんこっちゃない」

本当に舌を焼かれたのだろう。火傷なんて生易しいものではなく、苦痛に悶えるアントンを旅人さんはただ無表情で見ていた。憐れむように、蔑むように。あるいは、疎外するように。

「……上からはさあ、なるべく生け捕りにしろって言われてるのよね。でもさ、なるべくってことはちょっとくらい手違いがあってもまあ許してくれるって意味よね？」

それは、明らかな死刑宣告だった。その意味はアントンさんにもきちんと伝わったようで、彼は震える。焼かれた舌の痛みが彼に恐怖を刻み付けたのだ。

「ま、待て、やめろ。助けてくれ」

「今更命乞いとは、惨めねえ」

「何でもいいから助けてくれ、お願いだ！」

「嫌よ。あたしは神様じゃないのよ？ 後悔も謝罪も懺悔も贖罪もいらない。何もいらない。ただ、死になさい」

旅人さんがアントンに向かって手をかざした。すると、胸のランタンから溢れ出した炎が彼女の突き出した手に集まっていくのだ。

「魔導騎士団特異的異端戦闘部隊。通称、魔女部隊^{サブト}所属。炎の魔女ジャック・オ・ランタン。あんたを殺す者の名よ。地獄だか天国だかで好きなだけ呪いなさいな」

そして、彼女は唱える。目の前の鬼を焼き殺す魔法を。

「地を彷徨^{さまよ}いし亡者^{フレイアー}達よ。神への怒りを命を吹き消す息吹と換えん！ 《亡者の息吹》！」

集まっていた炎が一つの大きな塊となり、“ゴウツ”という音と共に彼女の腕から延長線上にアントンに向かう。凄まじい速度の炎の息吹を彼が避けられるはずはない。ほんの一瞬でアントンは炎に吞まれ、焼死体となったのだ。

その様子を見て、僕はただ息を吞むことしかできなかった。悲鳴すら、聞こえずにアントンは死んだ。それはつまり、彼女の炎が一瞬でアントンを骨の髄まで焼き尽くしたことを意味する。本当に後悔する暇もなかっただろう。勿論、贖罪の暇も。

これが、魔女の実力なのだった。

終わった。そう思うと、ようやく全身の力が抜けた。これでもう、命の危機なんて馬鹿げた局面は終わったのだ。

すると、姉ちゃんが目を覚ました。何とか起き上がろうとしていたので、その背中を支えた。何も言わずの行動だったので、姉ちゃんは一瞬驚いていたが、雰囲気ですれが僕だとわかり、大人しくなっ

た。全て任せたと言わんばかりに。

「ねえ、ルーちゃん。お姉ちゃんはちょっと状況が理解できないんだけど、説明してくれる？」

まあ、そうだろう。わからなくて当然だ。僕だってまだ整理ができていないのだ。ただ、とりあえずもう心配はいらないのだから、まずはそれを伝えてあげよう。大丈夫だと、もう終わったよと、そういう風な言葉をかけようとした。

【だけど声がなかった。】

口は動いている。自分では喋っているつもりだ。だけど、声がない。まるで僕の口から音が切り離されてしまったかのように、息を吸う音も吐く音もしないのだ。言葉が、消えている。

「ルーちゃん。どうしたの？　ねえ、ルーちゃんなんだよね？　やだよ、お返事してよ。お姉ちゃん、怖いから。ねえ」

僕が何もできず固まっていると、旅人さんが悲しいようなため息を吐いた。

「　　そう。あんたは、【言葉】を奪われたのね」

第三話『旅立ち』

契約。それは人が魔女の所有物となり、その命を魔女の為に使うことを誓う儀式。本来は厳粛な儀式らしいのだが、僕と旅人さんは緊急事態だった為、面倒な手順を全てぶっ飛ばして行った。それでいいのかと思ったのだが、旅人さん曰く重要なのは手順ではなく結果の形らしい。これは魔法の基本的なルールでもある、形と役割が同じなら本物も偽物も関係ないというところから来ている発想のようで、ようは偶像崇拜。神を崇めることと神を模した偶像を崇めることは同義なのである。

魔女と契約をした人間は人智を超えた力を手に入れ、願いを一つ叶えることができる。願いの条件はただ一つ。それが自分じゃない誰かの為の願いであること。そして、所有物となった人間は力と願いと引き換えに代償を支払わなくてはいけない。それは呪われた魔女に手を貸した罰なのだそうだ。

僕はその代償に【言葉】を奪われたのだった。

+++++

「本当に行っちゃうんだな」

ブルーノのあんちゃんが寂しそうに呟いた。

場所は古着屋の前。アントンを倒し、姉ちゃんを救い、最終的には全員無傷だった昨日の出来事から一〇時間ほどたった今は昼間である。

僕は旅人さんに付いて行き、騎士団に魔女の所有物として入団することとなった。それについて異論はない。僕はそうなることを覚悟して彼女と契約したのだから。ただ、扱いが完全にモノなのは若干ながら反論してやりたくなっている。多分、したところで一蹴されると思うが。

現在はその旅支度を終えて、あんちゃんに最後の挨拶をしていた

ところだ。

「ほら、古着で悪いが旅に最適そうな服を選んでおいた。その作業服だけじゃ困るだろ」

確かに作業服だけじゃ心もとない。仮にも旅人さんのお供をするのだから、少しはオシャレという奴もしなくては。

僕は丁寧にまとめられた服を受け取り、あんちゃんに頭を下げた。

【ありがとう】の言えない僕には、こうすることしかできない。

「お前は本当に行っちまうし、本当に喋れなくなっちまったんだな
あんちゃんは言うのだ。」

「あいつが魔女だとわかってたら、絶対にお前に近づけさせなかったんだけどな」

その言葉に僕は強く反論した。旅人さんは悪くないと、これは僕に責任で僕のせいなのだから、だから旅人さんを恨まないでくれ、と。しかし、言葉を奪われた僕の声があんちゃんに届くはずもない。あんちゃんはただ首を傾げるだけだった。

魔女が大衆に忌み嫌われる理由がもう一つある。それが、この契約だ。何故なら、この契約をする人間は悪人ではないのである。お伽話のように悪人が罰を受けるならば、それは誰しもが納得する罰であろう。ただ、魔女と契約をして罰を受けるのは悪人ではないのだ。自分じゃない誰かの為に自分の心臓を差し出す人間を人々は悪だとは思わない。

だからみんな魔女を嫌悪する。人の欲ではなく優しさに付け込むいやらしい魔女を。

でも、僕は違うのだ。だって僕は善人じゃないから、罰を受けて当然の人間なのだから。しかし、それをあんちゃんに伝えるのは難しい。

(何でもない)、とあんちゃんにもわかるように大きく口を開けて言い、僕は首を横に振った。あんちゃんは少し怪訝そうにしてたが、すぐに他の話題に移った。

「エミリアのことは俺に任せろ。大丈夫だ、女一人養えないほど甲

斐性なしじゃねえよ」

宿屋スナツフルズはアントンのおかげで半壊。そして、昨日の内におじさんもおばさんもアントンに殺されていたのだ。考えてみれば、アントンが宿屋に上がっていたにも関わらず、おじさんとおばさんが寝ていたなんておかしい話だ。本来ならばそれは鍵のかかってない玄関同様、その時点で気づくべきこと。まったくあの時の僕は本当に自分のことしか考えてなかったらしい。あるいは、死んでもよかったと、そう考えていたのだろう。

誰もいない宿屋に姉ちゃんが一人で住むわけにもいかない。彼女は人の助けがないと日常生活すら満足に送れないのだ。そこで、あんなちゃんが面倒を見てくれることになった。一応僕からも仕送りをするが、実質しばらくはあんなちゃんに姉ちゃんを養ってもらうこととなる。最初はあんなちゃんに迷惑だと僕は反対していたが、下手に介護士を雇うよりいいだろうし、俺に任せるとあんなちゃんがむしろ張り切っていたのでお願いすることにした。

「安心しろよ、エミリアに近づく男は俺がみんな追い払ってやる」

そういう類の面倒は見てくれなくてもいいんだけど……。僕だつてそこまで徹底したシスコンになるつもりはない。

「それでよ…… お前、姉ちゃんに顔合わせたの昨日の夜が最後だろ？ あとはいいから、最後に顔見て行けよ」

「……」

正直いらないお節介だった。僕は意図して姉ちゃんと合わないようにしていたのだから。でも、確かにこれが最後になるかもしれないのだ。いつ戻れるかわからない。明日死んでしまふかもしれない。僕が選んだ道はそういう道だ。

僕は頷いて、店の奥へと入っていった。

店の奥の唯一の扉。元々はあんなちゃんが寝室としていた部屋が、姉ちゃんに割り当てられた新たな住居だ。わざわざ姉ちゃんの為に部屋まで開けてくれなくともよかったのだが、あんなちゃんは店で寝

るからいいんだそうだ。……前から思っていたんだが、どうにもあんちゃん姉ちゃんを特別扱いしている風に見える。弱みでも握られているんだろうか。

扉をノックして、中に入る。

「む。そのノックの仕方はルーちゃんですな」

何故か探偵口調の姉ちゃんを華麗にスルー（ていうかスルーしできない。突っ込む言葉はもうないのだ）して、僕は姉ちゃんがいるベッドに座った。きちんとここにいることをわかってもらう為に姉ちゃんの手を握る。昨日までは喋っていたらこと足りたことだ。

「大体の事情はね、魔女さんに聞いたよ。ルーちゃん、騎士団に入るんだって？ 凄いなあ、みんなに自慢できるね……モノとしてだけ」

明らかに馬鹿にされた。できればそこは黙っていて欲しかったが、旅人さんのことだから面白おかしく喋りまくったのだろう。

「でも、そっか。ルーちゃん行っちゃうんだね。離れて暮らすなんて考えたこともなかったなあ。一体どうなるんだろ」

僕は何も言わない

「正直言つとね、私は寂しいよ。ずっと一緒だとばかり思ってたから、私は寂しい」

僕は何も言わない。

「ルーちゃんがいれば、私は何もいらなかったよ。暖かいベッドも食べ物もいらなかった。ルーちゃんがいれば、あの路地で一生を終えてもいいって思ってたよ。本気でね」

僕は何も言わない。

「なーんて、後ろ髪を引っこ抜くようなことを言ってみましたー。どう？ うるつときた？」

僕は何も言わない。僕は何も言えない。

その為の言葉は無くなってしまった。

これ以上ここにしても辛くなるだけだとわかった僕は出ていくことにした。最後に姉ちゃんの頭を軽く撫でて立ち上がる。すると、

姉ちゃんが僕を呼びとめた。

「ルーちゃん」

「……」

「大好きでした」

「……」

「愛してました」

「……」

「いつてらっしやい」

涙ぐみながら別れの言葉を口にする姉ちゃんに僕は何も言えず何も言わず、逃げるように部屋から飛び出した。

足がもつれ、廊下に倒れた。そして、僕は立ち上がれなくなった。涙が、止まらない。悲しくて仕方ない。辛くて、死にたかった。別に姉ちゃんと別れるのが悲しいんじゃない。いや、それも十分悲しいが、これはその為の涙じゃない。突きつけられた現実が痛すぎて、辛すぎて、悲しいだけだ。

僕は姉ちゃんに何も伝えられなくなってしまった。

ありがとも、大好きも、愛してるも、いつてきますも、何も何も伝えられなくなってしまったのだ。別れの言葉すら、口にできない。

『契約の代償はその人にとって最も大事なものが選択される』

旅人さんはそう言っていた。どうやら確かにその通りらしい。僕にとって言葉は僕の知らない間に最も大事なものになっていた。言葉は姉ちゃんと僕が繋がれる唯一の手段だったのだ。目の見えない姉ちゃんに僕が思いを伝えることのできる手段は言葉だけだった。僕は姉ちゃんを救って、その変わり姉ちゃんに何も伝えられなくなってしまった。

ふざけるな。

いくら何でもあんまりだろ神様。

僕は姉ちゃんを助けただけなのに、どうしてこんなことになるんだ。

魔女に加担することはそこまでの罪なのか。どうして魔女は呪われなくちゃいけないんだ。

すると、店の方から女の人が歩いてきた。金髪、赤の瞳、赤いフードを深く被り、首から古ぼけたランタンを提げた女。そんな妙な格好している人は二人としない。

「何泣いてんのよ。男のくせに」

旅人さんだった。

「不思議なもんよね。泣き声すらしないんだから」

言いながら、彼女は僕の前に立った。泣き止んで、立たなくてはそう思ったが、泣き止める気も立てる気もしなかった。もう僕の思いは姉ちゃんには届かないし、僕の声は誰にも届かないのだ。僕は一人ぼっちになってしまった。それを思うと。

「聞こえてるわよ」

旅人さんが言った。突然の一言に僕は固まる。

「昨日から気が付いてただけで、どうにもあんたの心があたしに流れ込んでるみたいなのよね。契約の影響だと思うわ。前例はないけど、契約に関してはわかってないことの方が多いから、有り得ないはないと思う。神様の少なすぎる慈悲ってところかしら。大丈夫よ、あんたからあたしへの一方通行だけど、あんたの思いは、あんたの声は、あたしにはきちんと届いてるわ」

だから安心なさい、と言って彼女は僕に手を差し出した。その手を取り、僕は立ち上がる。しっかりと自分の足で立てていた。気づくと涙は止まっていた。僕の声は途絶えていない、一人ぼっちじゃないとわかったからだろうか。

「ジャック・オ・ランタン。あたしの名前よ。今度からはそう呼びなさい」

僕が頷くと、ジャックは店先に戻って行く。馬の蹄ひづめの音が聞こえ

た。どうやら馬車が来たらしい。もう、出ていかなければならない。僕は姉ちゃんのいる部屋の扉に向かって頭を下げた。

今までお世話になりました。こう言うと、お世話してくれたのはルーちゃんだよ、とあなたは言い返すだろうけど、でもやっぱり、僕はあなたにお世話になったと思うから、だからありがとうと言わせてください。さようならは言いません。正確には言えないのですが、その変わり帰ってきたら、ただいまを伝えさせてください。もう僕に言葉はないけれど、言葉以外にもきつと伝える方法はあると思うんです。彼女のおかげでそう思えたんです。だから、僕はその方法を探してきます。少しの間だけ待っていてください。

あなたがいなかったら僕は生きようとも思いませんでした。あなたがいたから生きれました。あなたがいたから幸せでした。あなたの弟は幸せでした。

いつてきます。音もなく呟いて、僕はその場から離れた。

「シスコン」

馬車で待っていたジャックが開口一番に僕にそう言い放った。

ああ、そうだよ。

僕は姉ちゃんが大好きだったんだ。

+++++

一頭立ての馬車の乗り心地は快適だった。カターニヤの道がきちんと整備されているというのもあるだろう。僕は馬車なんて乗り物は初めてで若干緊張していたが（馬が暴れたら死ぬんじゃないかと心配していたらジャックに笑われた）、乗ってみてしまえば緊張も感動もどこへやら、普通に流れゆく風景を楽しむ余裕までできた。

「これからのことだけど、まずはシエナの町にいくわ。そこは魔導騎士団の支部があるから、次の指示を仰いで……そのあとは指示に

よるから、とにかく最初の目的地はシエナよ。途中までは馬車で、あとは歩くから。まあ、三日もあれば着くと思うわ。わかった？」

僕は首を縦に振った。

「なら、あんたは少し休みなさい。疲れてるでしょ？」

確かに疲れていた。肉体的には問題ないが、精神的に疲労している。あれだけ畳み掛けるように色々あったのだ。当たり前だろう。ジャックの言う通りに休むことにした。休んで心を回復させよう。

少しだけ窓を開けて風を感じながら目を閉じる。

当たり前のことだが、沈まない太陽はない。

だから人は灯りを灯す。

当たり前のことだが、朝日は眩しい。

だから人は目をつむる。

当たり前のことだが、未来を知ることとはできない。

だから人は暗闇を恐れる。

当たり前のことだが、永遠に続く幸せなど、この世には存在しないのである。

だから人は神に祈るのだ。せめてこの幸せが少しでも長く続くようにと。

僕の幸せは跡形もなく無くなってしまった。それでも僕は神に祈ろう。あのくそつたれな神様に祈ってやるのだ。せめて彼女が幸せであるようにと。

言葉を失い、何もかもを失い、二人ぼっちになった僕の旅が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8975o/>

ロストアローズ

2010年11月27日00時10分発行